

できごと

「子ども図書研究室講演会」

新型コロナウイルス感染症拡大予防に配慮し、人数制限を設けつつも、令和4年7月5日(火)に3年ぶりに対面で講演会を実施し、95名の方に参加していただきました。また、当館での講演後、7月26日(火)から9月2日(金)の間、期間限定で動画を配信しました。1ページから3ページで内容を報告します。

「新刊サロン」

当館子ども図書研究室では、毎月200冊から300冊の新刊を受け入れており、「新刊サロン」ではその中から職員がおすすめの本の紹介をしています。「新刊サロン」は対面での開催に加え、現在はYouTubeでも動画を配信しています。期間中はどなたでもご覧いただけます。第3回の配信は10月末を予定しています。

【視聴方法】下記二次元コードまたは当館ウェブサイトから、URLをクリック

県立中央図書館公式YouTubeチャンネルに移動します。※配信期間にご注意ください。↓



令和4年度 子ども図書研究室講演会

慶應義塾大学環境情報学部教授である今井むつみ氏に『言葉の発達、思考の発達を助ける絵本読みと読書』と題してお話いただいた講演の内容を報告します。

大人は子どもに言葉を教えることはできません。大人が子どもに言葉の意味を話して説明したとしても、難しくて分かりません。例えば、「ウサギ」という言葉を覚える際、子どもがウサギに出会った時や図鑑などを見ながら「これはウサギっていうのよ」と説明するのが一般的な方法です。しかし覚えてだけでは使えるようになりません。ウサギという言葉を実際の意味で使えるためには、認識した物体がウサギであるか、それとも他の動物なのか、子ども自身が境界線や範囲を考えることをしないと行かないのです。

これは「ウサギ」のような名詞だけでなく、動詞にも言えることです。小学校2～4年生の子どもにチーズをさいている絵を見せて「チーズをたてに〇〇〇いる」の〇〇〇にどんな言葉が入るか問いかけました。すると多くの子どもが自動詞と他動詞が区別できていないため「さけて」と答えました。不正解の中には「とろけさせて」という答えがありました。「チーズがとける」から「アイスがとける」など、主語が変わっても動詞の意味自体は変わらないことを知るために、まずは主語となる物と動詞を関連づけることが必要です。しかし、「チーズ」と「とろける」という動詞が強烈に結びついてしまうと、「チーズ」

と聞いた途端「とろけさせて」と答えてしまうのです。言葉を覚えるためには、自分で意味を考え、使ってみることが必要です。使う中では当然間違いが生じます。それを修正してまた使ってみる、ということを繰り返して「この動物はウサギと呼べるかどうか」などの言葉の境界や範囲だけでなく、言葉が使える状況や場面を判断できるようになります。

それから、新しい言葉を聞いた時は既に知っている言葉と比較してすり合わせをします。新しい言葉を覚えるだけではなく、既に知っている言葉の範囲もアップデートや修正をすることがよくあります。そして言葉の意味を考え、単語と関連付けながら考える過程で言葉の仕組みを理解していきます。

子どもは知っている言葉を自分で考えて使ってみる時、推論をしています。カバンを様々なパターンで持つ様子のイラストを3歳の子どもたちに見せてみました。すると「持つ」「抱える」「担ぐ」「背負う」などそれぞれにふさわしい絵の多くに対して「背負う」と答えました。その他にはカバンを抱えている絵については「抱きしめる」、言い方が分からないものには「する」と言ってジェスチャーをして、伝えようとする子もいました。この時に行っているのが推論です。どんな風にカバンを持っているのか表現するために知っている言葉や知識を総動員し、既知の言葉を組み合わせています。またこのような例もあります。コンデンスミルクのことを「いちごのしょうゆ」と表現したり、動詞の場合には「蹴る」という動詞を知らない子どもが「足で投げる」と言ったりします。その他にも野球の投手を「ピッチャー」、捕手を「キャッチャー」ということから、打者について「バッチャー」という言葉を作ることもあります。言葉を覚えることは、考える訓練、推論することです。また考えることは知っている言葉や知識を統合して推

論し、問題解決をすることであり、思考力を育てることにつながります。

『算数文章題が解けない子どもたち』（今井むつみ、岩波書店、2022年）では子どもが文章問題のどこで困難を覚え、困難の根っこに何があるのかを調査しています。

小学校全学年の子どもたちに「子どもが14人一列に並んでいます。ことねさんの前に7人います。ことねさんの後ろには何人いますか」という問題を出しました。正答率は3年生では30%以下、5年生でも50%程度でした。問題の中には14人と7人、2つの数字が出てきます。それを掛け算にして $14 \times 7 = 98$ と答えを出す子どもがいて、計算自体は合っています。しかし掛け算をどの状況で使うのかは分かっていることが分かります。この問題は図に描いて考える単元で、子どもは図に描くことはできませんが、式に落とし込む時に、ことねさんを表す1を入れることができずに不正解になってしまいます。時間などの単位の問題についても同様の間違いが多く見られます。文章問題が解けないことを読解力の問題として、ひたすら類題を解かせるのはよく行う方法ではありますが、それでは問題が解けるようになりません。ここでは与えられた情報の行間を埋めながら情報の意味を解釈する必要があります。そして情報に潜むパターンを見つけ、1つの事例から他の事例へ情報や知識を拡張する、このような過程が重要なのです。先程のように、式を正しく立てられない、思考の付加が大きすぎるとどうしていいかわからなくなってしまうような時、子どもが自分で考え方を工夫できるような手助けをすることが大切です。

語彙をただ知っているだけでなく、文脈が変わっても使える語彙力を育てることが学力につながります。語彙力を育てるには何が一番有効

かと言うと、小さい頃からの読み聞かせと読書です。『プーストとイカ』（マリアン・ウルフ著、小松 淳子訳、インターシフト、2008年）によると、読書の本当の目的、目指すべき目標は、書いてある文章の内容を自分の血肉にしてそこから自分の考えを作っていけるようになることです。小学校以降の子どもの語彙の成長、発達に最も大きな役割を果たすのは読書であり、自分で読むこと、読んでもらうことによって語彙を増やしていきます。幼児期での大人が話す言葉のシャワーや絵本読みの経験は子どもの一生に影響を与えます。実際豊富な読み聞かせ経験の有無は就学までの獲得語彙数に「3000万語」も差を生むとアメリカの調査で言及しています。子どもは新しい言葉を覚えていく中で、言葉の仕組みも学び、自分で探索していきます。

日本語はオノマトペ、擬音語、擬態語を非常に豊富に持っています。絵本はオノマトペの宝庫であり、『しろくまちゃんのほっとけーき』（わかやまけん、こぐま社、1980年）では、しろくまちゃんがホットケーキを作る様子を「ぼたーん」「ぴちぴち」「ぷつぷつ」といったオノマトペで表現しています。これを動詞で説明しようとする難しくて面白くないですが、オノマトペなら感覚的に分かる場所があります。絵本が動詞の意味の理解をする手法として優れていることは他の絵本からも分かります。『くっついた』（三浦 太郎、こぐま社、2005年）では、キリンさんがくっついて、アヒルさんがくっついて、自分とお友だち、兄弟もくっついてという文脈から、ものともものがくっつく意味が分かり、同じ動作をいろんなものに使えるということを小さい子どもでも感じることができます。『おおきいちいさい』（元永定正、福音館書店、2011年）では、大きい小さいということが様々なものの関係の中で、比較を通して表現されており、比較も認知の発達を促す上で大事な役割をしています。

読み聞かせ、読書というと紙とデジタルどちらがよいのかという問いがあります。紙と比べてデジタルに欠ける要素は2つあります。1つ目はデジタルでは一方向の流れにしかならないことです。紙で大人が対面で読んであげる時はどこを読むか、いつ読むか、子どものペースに合わせて名前を言ったり、教えたりしています。例えば特定のページ、特定のものに対して、もの名前を言ってあげる時、実はリードを取っているのは子どもです。この時大人と子どもは紙の絵本を通じて双方向のやり取りをしています。しかし、デジタルの絵本ではもともと作られたものであるため双方向のやり取りにはならず、上手く学ばせません。2つ目のデジタルに欠けることは想像の余地がないことです。紙の本では絵本に素敵な絵があり、想像の余地がたくさんありますが、デジタルではアニメーションの細部まで鮮やかに描かれてしまうため、想像する部分を奪ってしまいます。この2点がデジタルと紙の本との大きな違いと言えます。

言葉を教える時は子どもが親をリードしており、子ども自身の行動が子どもの言葉の学びをより促進させます。そのため、絵本を読む時に子どもの興味の先に注目することが大切であり、それが絵本読み、読み聞かせを通じて言葉の発達、認知の発達、思考の発達、推論の力の発達を促す、そして学力の基盤になっていくということです。

今回の講演で、子どもの言語習得の過程、そして言語習得には絵本の読み聞かせや読書が大きな役割を果たしているということを学びました。
(上村)

知識



『47 都道府県の郷土玩具 1
北海道地方・東北地方』
日本玩具博物館／監修
井上 重義／監修
大月書店
2022 年 4 月

全国の郷土玩具を取り上げたシリーズの第 1 冊目、北海道地方・東北地方編。郷土玩具は土地の風土や暮らしの中で生まれ、説話や信仰を反映しており、郷土の味わいを感じられるものである。北海道網走市からは「小さな木の子ども」という意味の木彫りの人形「ニポポ」を紹介している。「ニポポ」は樺太（サハリン）に住んでいたアイヌの人たちが狩りや病気のお守りとして大切にしていたものである。八戸市の八幡馬、会津若松市の赤べこなど、各地の郷土玩具の由来や解説などがあり、郷土玩具を深く知ることができる。 【小学校中学年から】（上村）

知識



『知ろう!あそぼう!楽しもう!
はじめての手話』
大杉 豊／監修
ポプラ社
2022 年 4 月

1 巻では、聴覚に障害のある子の 1 日、手話の成り立ちや簡単な手話、世界の手話など手話の世界を知ることができる。2 巻は、日常会話を手話で表現する。3 巻は手話を使った遊びの紹介。4 巻は、歌を手話で表現する。5 巻は、いろいろな職業に就く聴覚障害のある方の子供時代、その職業を目指したきっかけ、仕事をすすめる上での工夫などインタビューがまとめられている。手話は、イラストで紹介されているが QRコードが掲載され動画でも確認することができる。 【小学校中学年から】（三枝）

読物



『香君』
上橋 菜穂子／著
文藝春秋
2022 年 3 月

遙か昔、人々が飢えに苦しみ死に絶えようとしていたとき、神郷から降臨した初代香君によってもたらされたという奇跡の稲、オアレ稲。その力によりウマール帝国は繁栄してきた。しかしある日オアレ稲に害虫がつき、深刻な食糧危機に見舞われる。幼い頃から人並外れた嗅覚を持ち、生き物の〈香りの声〉を聞いて生きてきた少女アイシヤは、その危機に立ち向かう。登場人物の魅力や読ませる筆力が光る。物語のおもしろさを味わいつつ現代社会に通ずる問題を考えさせられる。

【中学生から】（山下）

絵本



『アリのかぞく』
島田 拓／ぶん
大島 加奈子／え
福音館書店
2022 年 4 月

1 匹の女王アリが家族を増やし、巣を広げていく様子を描いた絵本。クロオオアリの女王アリは地面の下に部屋をつくり、卵を産む。そして幼虫に餌をあげ、からだをなめ、土をかぶせる。働きアリが誕生すると、今度は働きアリが家族の世話をする。女王アリはその間も卵を産み続け、時には引越し、どんどん家族を増やす。子どもにとって身近なアリの生態や営みが、丁寧な絵と読みやすい文章で表されている。巣の断面の描写が子どものイメージを膨らませてくれる。 【幼児から】（山下）